

レビ記21章「祭司たちの聖」

1A 祭司たちの規定 1-9

1B 近親のみの葬儀 1-6

2B 淫行から離れた婚姻 7-9

2A 大祭司の規定 10-15

1B 近親さえ弔えない葬儀 10-12

2B 処女のみの婚姻 13-15

3A 身に欠陥のあるアロンの子孫 16-24

1B 身の欠陥 16-20

2B 神のパンのささげ物 21-24

本文

レビ記 21 章を開いてください。私たちはレビ記の後半部分を学んでいます。レビ記全体の主題が「聖め」であり、前半部分は「いけにえによって聖なる神に近づく」ことでありました。そして後半は、「聖別によって神と共に歩む」が主題になっています。聖なる神と共に歩むためには、聖さの中に生きていかなければいけない、というものです。

これまで私たちは、異教の慣わしからイスラエルを守るために、それらに関わるのを禁じる戒めが多く書かれていました。血を食べてはならないとか、男女の性が神の前に尊いものとして聖く保つ必要があるとか、十戒にあるいろいろな戒めも読みました。また、中傷をしてはならないとか、寄留者ややもめを憐れむ戒めもありましたが、その背後には「隣人をあなた自身のように愛しなさい」という動機に基づくものです。

そして、21 と 22 章は、「祭司といけにえの聖別」が書かれています。21 章は、祭司がしては良いこと、そうではないことについて主は教えておられます。一般のイスラエル人には許されていることも、祭司は聖所の中で、神に仕えるので、行えることに制限があります。22 章は、献げるものが聖でないといけなことが教えられます。欠陥のあるものは献げることができません。

ところで、私たちが旧約聖書で「祭司」という言葉を聞いたら、二つのことを思い出さなければいけません。一つは、新約聖書においては教会の私たちが「祭司」と呼ばれていることです。「I ペテ 2:4-5 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。」

かつて、地上の幕屋また神殿で、主に仕えていた祭司たちですが、主は、ご自分の弟子たちに聖霊を降り注がれました。そのことによって、神ご自身が信者たちの集まりの中に、聖霊によって宿ってくださいます。ゆえに、私たちは一人一人が、主に対する祭司であり、霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる者たちなのです。御霊の賜物が分け与えられて、賜物を用いて主に仕えます。ですから、これから読む祭司に対する規制から、実は私たち自身にも当てはめることができることが、多くあります。

そして、さらに新約において明らかにされたのは、イエス・キリストこそが偉大な大祭司だということです。「ヘブル 4:14-15 さて、私たちには、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司がおられるのですから、信仰の告白を堅く保とうではありませんか。私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。」大祭司は、人の弱さを携えながら、神の前に出ていく仲介者です。そして神の恵みと祝福を人々に分かち合う仲介者です。その仲介を果たされる方を、指し示すのが地上の大祭司です。

1A 祭司たちの規定 1-9

1B 近親のみの葬儀 1-6

¹ 主はモーセに言われた。「アロンの子である祭司たちに言え。彼らに言え。親族のうちの死人によって自分の身を汚してはならない。² ただし近親の者、すなわち、母や父、息子や娘、兄弟の場合は例外である。³ また近親の、結婚したことがない処女である姉妹の場合は、彼女によって自分の身を汚してもよい。

祭司たちに対する戒めの一つは、葬儀における遺体です。私たちはこれまで、死体に触れる者は、汚れるという教えを読みました。それは、罪から来る対価が死であり、死が罪から来ているものを象徴しているからです。自分の家族が死ねば、その家族が当然ながら遺体を葬らないといけません。しかし、祭司らは、近親の者たち以外は触れてはいけません。親族であっても、近親でなければ、触れてはいけません。近親であれば触れてよいとされています。ただし、姉妹で結婚をすれば、その他の家族の者になっていますから、親族ではあっても近親ではなくなります。まだ結婚をしていない姉妹だけを葬ることができます。

⁴ 一族の中で主人が自分の身を汚し、自分を冒瀆することになってはならない。⁵ 頭を剃ってはならない。ひげの両隅を切り落としてもいけない。からだにいかなる傷もつけてはならない。

これは、悲しみを表す行為です。しかし、それは周囲の異教の風習に倣ったものです。それらは、死者の霊を弔い、死者の霊に仕えるための儀式です。ですから、たとえ悲しみを表すものであっても、異教の儀式に倣うものであれば行ってはいけません。

私たちキリスト者が、仏式などの葬儀において気をつけなければいけないことは、このことです。死んだ者が神となり、または祖先の霊となり、その死者の霊に仕えているというのが全ての前提で葬儀が執り行われます。しかし、それは聖書のいう霊媒行為そのものであり、神の御霊ではない異なる霊と交わることに他なりません。したがって、直接的に礼拝行為に当たるものは、たとえそれを形式的に行ったとしても避けなければならないものです。

⁶ 彼らは自分の神に対して聖でなければならない。また自分の神の名を汚してはならない。彼らは、主への食物のささげ物、すなわち彼らの神のパンを献げるからである。彼らは聖でなければならない。

これら葬儀において、制限がかけられているのは、自分たちが聖でなければならないからです。主の近くで仕えている者は、主が聖であることを人々に示せないといけないからです。そして、「神のパンを献げる」とあります。これは、穀物で作るパンだけに限らず、動物のいけにえも含むあらゆる食べ物を含みます。神がお食べになる、という意味合いで「パン」と言っています。

2B 淫行から離れた婚姻 7-9

⁷ 彼らは淫行で汚れている女を妻としてはならない。また夫から離縁された女を妻としてはならない。祭司は神に対して聖だからである。⁸ あなたは彼を聖別しなければならない。彼はあなたの神のパンを献げるからである。彼はあなたにとって聖でなければならない。あなたがたを聖別する主であるわたしが聖だからである。⁹ 祭司の娘が淫行で身を汚すなら、その父を汚すことになる。その女は火で焼かれなければならない。

葬儀についての規制の次は、婚姻における戒めです。淫行で汚れている女を娶ってはいけません。そこには、離縁した女も含まれます。さらに、祭司の娘が淫行を犯したら、厳しい裁きがあります、火で焼かないといけません。

イエス様は、当時のユダヤ人の宗教者たち以上の結婚の基準を次のように語られました。申命記に、離縁状についての教えがありますが、それをもって夫が妻を離縁することは律法にかなっているかと、イエス様をパリサイ人が試しました。主は応えられました。「マル 10:5-9 モーセは、あなたがたの心が頑ななので、この戒めをあなたがたに書いたのです。しかし、創造のはじめから、神は彼らを男と女に造られました。『それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる』のです。ですから、彼らはもはやふたりではなく、一体なのです。こういうわけで、神が結び合わせたものを、人が引き離してはなりません。」一つになっているというのが、唯一の神の聖さを示しています。ですから、離縁して他の女に行く、ということ自体が、その聖さを損なうことになるので、一生涯の男女の結婚を説かれています。イエス様の教えは、まさに祭司と同じ基準です。

葬儀についても、婚姻についても、かなり高い基準、厳しいものさしであります。けれども、そこには理由があり、繰り返されているのが、「彼はあなたの神のパンを献げるからである」というものです。ここで取り扱われているのは、「交わり」です。「神のパン」とあるように、祭司が神にいけにえを献げることによって、聖なる神と一つになっていることを意味しています。聖書における食事は「一つになる」ことを意味します。同じものを分かち合って、それぞれの腹の中に入ることによって、神秘的にその食べ物を通して互いに一つになったことを表しているのです。

葬儀については、死者の霊と一つになることを異教が求めます。それゆえ、その慣わしを表面的にだけ真似たとしても、主との交わり、その一体性を壊すこととなります。偶像の神などいないとして、偶像の宮で食事をしていた者たちがコリントの教会にいたので、パウロが警告しました。「Ⅰコリ 10:19-20 私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像に献げた肉に何か意味があるとか、偶像に何か意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。むしろ、彼らが献げる物は、神にではなくて悪霊に献げられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。」

そして婚姻は、まさに交わりです。同じくコリントの教会には、遊女と交わっている者たちさえいました。コリントは、そのアプロポリスに異教の宮があり、女祭司たちが町に降りて来て、男たちの相手します。こうした習慣があったので、教会の者たちも、「信仰のことは信仰のこと。それと肉体で行っていることは別だ。」として、妥協していたのです。しかし、パウロは、それはありえないことを話しました。「Ⅰコリ 6:15-17 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです。それなのに、キリストのからだの一部を取って、遊女のからだの一部とするのですか。そんなことがあってはなりません。それとも、あなたがたは知らないのですか。遊女と交わる者は、彼女と一つのからだになります。「ふたりは一体となる」と言われているからです。しかし、主と交わる者は、主と一つの霊になるのです。」

そして、不信者との結婚についても、そこに調和が保てないことは明白です。今、信仰を持っていない時に結婚していて、どちらかが信者になった時は、その結婚は聖なるものですが、信者がこれから結婚する時に不信者を選ぶのは、非常に賢くありません。「Ⅱコリ 16:14-15 不信者と、つり合わないくびきをともしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。」

2A 大祭司の規定 10-15

ここまでが、祭司たちに対する規制でした。次は大祭司に対するものです。同じく葬儀と婚姻についてのことです。

1B 近親さえ弔えない葬儀 10-12

¹⁰ 兄弟たちのうち大祭司で、頭に注ぎの油が注がれ、任職されて装束を着けている者は、その髪の毛を乱したり、その装束を引き裂いたりしてはならない。¹¹ いかなる死人のところにも入って行ってはならない。自分の父のためにも母のためにも自分の身を汚してはならない。

葬儀においては近親者であっても死体には触れることができません。なんと、父と母のためにもその遺体に触れてはいけません。アロンが、自分の息子ナダブとアビフが異なる火を献げて、主からの火で焼かれてしまった時に、アロンは触れることができませんでした。彼のおじたちが、その遺体を運んでいます(10:4)。

そして、「その髪の毛を乱したり、その装束を引き裂いたりしてはならない。」とあります。これは、異教の慣わしとも違います。ただ、その悲しみや嘆きを表す方法です。それさえもしてはならず、アロンとアロンの残りの子たちにモーセは、「あなたがたは髪の毛を乱してはならない。また衣を引き裂いてはならない。(10:6)」と言いつけています。モーセが、岩を杖で二度打って、怒りを言い表した時に、主がモーセに、わたしの聖なることを示さなかったと言われたことを思い出してください。抑制の利かない感情を表すことは、主の聖なる姿を示していないということです。

しかし、これを見事に破った大祭司がいますね。カヤパです。「マル 14:63 すると、大祭司は自分の衣を引き裂いて言った。「なぜこれ以上、証人が必要か。…」カヤパが身に着けていたのは、まさに、任職された装束でした。皮肉にも、イエス様を罪に定めながら、律法をことごとく破っていたことに気づいていません。

これらのことをしてはならない理由が、「頭に注ぎの油が注がれ、任職されて装束を着けている」ということです。油注がれた者というのが、ヘブル語でメシアを示しています。そして装束は、神の栄光と美を表すものです。イエス様は、「神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れ」であると、ヘブル 1 章 3 節にあります。

¹² 聖所から出て行って神の聖所を冒してはならない。神の注ぎの油による記章を身に着けているからである。わたしは主である。

聖所から出て行ってはいけません。大祭司は、天におられる偉大な大祭司キリストを示しているからです。そして、記章とはかぶり物の下の部分についているもので、「主への聖なるもの」という言葉が刻まれています。イスラエルを大祭司が主に対して聖なる者として献げ、執り成していることを示しています。イエス様が、私たちを聖なる者として父なる神に献げ、天において、執り成しておられるのです。もし大祭司が出て行ったら、そのお働きを示さないことになってしまいます。

2B 処女のみ婚姻 13-15

¹⁴ やもめ、離縁された女、あるいは淫行で汚れている女、これらを妻としてはならない。彼はただ、自分の民の中から処女を妻としなければならない。¹⁵ 一族のうちで子孫を汚すことのないようにするためである。わたしは彼を聖別する主だからである。」

婚姻においては、離縁した女や淫行で汚れている女だけでなく「やもめ」も含めて結婚してはならないと命じています。基準が高くなっています。そして理由は、子孫を汚すことのないためです。自分自身の聖さだけでなく、その子孫をも代表しているのです、基準が厳しいのです。

3A 身に欠陥のあるアロンの子孫 16-24

次の祭司についての規定は、身に欠陥のある者たちは、祭壇や垂れ幕の前で奉仕ができないというものです。

1B 身の欠陥 16-20

¹⁶ 主はモーセにこう告げられた。¹⁷「アロンに告げよ。あなたの代々の子孫のうち、身に欠陥のある者はだれも、神のパンを献げるために近づいてはならない。¹⁸ だれでも、身に欠陥のある者は近づいてはならない。目の見えない者、足の萎えた者、あるいは手足が短すぎたり長すぎたりしている者、¹⁹ 足や手の折れた者、²⁰ 背の曲がった者、背のきわめて低い者、目に濁りのある者、湿疹のある者、かさぶたのある者、睾丸のつぶれた者などである。

ここにおいて、気を付けなければいけないのは、身障者の価値が低いということでは決してないことです。二つの意味合いがあります。一つは、何よりも、イエス・キリストご自身を目で見える形で示している、ということです。次の章で学びますが、いけにえについても欠陥のある家畜を献げてはならないことを教えています。欠陥があることは、罪のあることを象徴しています。目で見えるかちで、神のかたちから損なわれて、傷があることを示しているのです。ですから、祭司は目で見えるかたちで聖なる者を表しているのです、身に欠陥があってはならないということです。その人の霊的な価値とは関係のないものです。

次に、機能的なものもあると思います。祭司たちの奉仕は、いろいろな働きがあります。家畜を屠ること。それを洗ったり、解体したりすること。またツアラアトに雇った人を見て、調べること。律法を教えることなど、多岐にわたります。単純に、これらの奉仕をする時に、身体に障害があるとできないものがありますね。例えば人間的に分かりやすく言えば、外科医の人が盲目であつたら、手術はまず執刀できませんね。これは差別でも何でもなく、そうした能力が備わっていないので、その働きができないのです。例えば、教会でも、賛美演奏の奉仕をする人が、基本的な楽器操作の仕方が分からなければ、情熱があつても、それだけでは賛美演奏の奉仕はできないのと同じです。

2B 神のパンのささげ物 21-24

²¹ 祭司アロンの子孫のうち、身に欠陥のある者はだれも、主への食物のささげ物を献げようと近寄ってはならない。彼の身には欠陥があるから、神のパンを献げるために近寄ってはならない。
²² しかし神のパンは、最も聖なるものであっても、聖なるものであっても食べることが許される。²³ ただし、垂れ幕のところに行ってはならない。祭壇に近寄ってはならない。身に欠陥があるからである。彼はわたしの聖所を汚してはならない。わたしがそれらを聖別する主だからである。』²⁴ モーセはこのことを、アロンとその子らとすべてのイスラエルの子らに告げた。

主は、誤解のないように、身に欠陥のある人ができないことは、祭司の務めの全てではないことを説明しておられます。祭司の務めの大きなものに、主への食物のささげ物を食べることです。それによって、主と一つになることを示しています。これを身に欠陥のある人がしてはいけないということではなく、することができます。

できなものは、献げる働きです。すなわち、外庭における青銅の祭壇にて、いけにえを屠り、血を注ぎ、肉や油を焼く作業です。それから、垂れ幕についてです。大祭司は香壇で、そこで出て来た香の煙を、垂れ幕を通して至聖所にある、宥めの蓋を覆います。こういった奉仕ができないのです。

主の聖なるところにいるのは、このように非常にいろいろなことが制限されます。しかし、それが窮屈ということではありません。聖なる主の栄光を間近に見る恵みにあずかっているとと言えるのです。その栄光を見て、主に仕えることに専念しています。いろいろなことに制限が出て、それは主の恵みによって、自ら捨ててもよいものなのです。

パウロは、福音宣教のために、自分自身を献げました。こんなことを言っています。「Ⅰコリ9:19-23 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには——私自身は律法の下にはいませんが——律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。律法を持たない人たちには——私自身は神の律法を持たない者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者のようになりました。律法を持たない人たちを獲得するためです。弱い人たちには、弱い者になりました。弱い人たちを獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをともに受ける者となるためです。」すべての人のしもべとなるのは、福音の恵みを受けるのです。